

## 二一 東の学者たちのキリスト礼拝

マタイによる福音書 一章一節―十八節

二〇〇八年十二月二十八日礼拝説教

秋吉隆雄 牧師

今日は二〇〇八年の最後の礼拝です。皆さんにとって、この年はどのような年だったでしょうか。世相はあらゆる面において、暗いニュースが多かったと思います。ことに年末にかけて金融危機がもたらした不況は深刻な苦しみを増幅させています。新しい年、希望の持ちにくい時代でありますけれども、わたしたちはイエス・キリストへの信仰に立って、望みに向かって歩んでいきたいと思っています。

教会の暦でクリスマス礼拝の次の週に読むように定められています御言葉は、先ほど読んでいただきました「東の学者たちのキリスト礼拝」です。今日はここを中心に、少し自由なお話をしたいと思います。

イエス・キリストのご降誕に関しては、マタイ福音書とルカ福音書に記されています。クリスマス・イブ礼拝ですべてを読み、また賛美し、出来事のすべてをわたしたちは知っています。このマタイ福音書、ルカ福音書が伝えるイエス・キリストのご降誕の出来事は、もちろん歴史的な事実ではありません。著者マタイとルカの神話的な創作です。聖書となった書物で最初に書かれたのは、紀元後五十年代のパウロの手紙です。パウロは、イエス・キリストの誕生についてガラテヤ書で「神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました」と書いています。イエス・キリストは女から生まれたと書いて、マリアという名前さえ書いていません。四つの福音書の中で最初に書かれたのは、七十年ごろのマルコ福音書です。そのマルコ福音書は、イエス・キリストのご降誕については全く触れずに、福音の初めは、バプテスマのヨハネの活動であると書いています。八十年代に入ってマタイ福音書、ルカ福音書が書かれました。この時、二人の著者は、イエス・キリストのご降誕の出来事を神話的に創作して、今から書こうとしているイエス・キリストの生涯のプロローグとしました。神話的な創作であるから意味がないというわけではありません。古代人は、神話的表現で事柄の本質を言い表します。このプロローグを読めば、これから先のイエス・キリストの生涯の意味が透けて見える。そのようなメッセージを込めて、マタイとルカはクリスマス物語を書いたのです。私は、イエス・キリストのご降誕物語

のスケールの大きさ、想像力の豊かさ、そしてイエス・キリストの福音を伝えようとするメッセージの確かさに圧倒されます。今日は、与えられたマタイ福音書からそのことを申し上げたいと思います。

降誕物語には、旧約聖書の預言の成就、そして歴史的に実在した人物や起こった出来事、そして当時の民間信仰などを織り交ぜ、壮大なスケールで、イエス・キリストのご降誕のメッセージが書かれています。まず、旧約聖書の預言の成就です。東の学者たちが、新しい王、メシアの誕生を知ってエルサレムにやってきます。そして、「その方はどこに生まれたか」と聞きます。ヘロデ王は、祭司長や律法学者を集めて「どこに生まれたのか」と問いただします。彼らは「ユダヤの地、ベツレヘムよ、お前はユダヤの指導者たちの中で、決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、私の民イスラエルの牧者となるからである」という預言者ミカの言葉からメシアの誕生地はベツレヘムであると告げます。メシア・キリストは、ダビデの町ベツレヘムで生まれると、旧約聖書の預言の成就としてこの地を名指ししています。そしてヘロデ王は、ベツレヘムの二歳以下の男の子を一人残らず虐殺したと記しています。ヘロデ王の伝記は書き残されていますが、幼児虐殺の事件は記されていません。これは明らかに創作であります。しかしマタイ福音書の著者は、この時の母親たちの嘆きと悲しみを、預言者エレミヤの言葉として伝えていきます。十八節に「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、慰めてもらおうともしない、子供たちがもういないから」と書かれています。このエレミヤの言葉には、次のような背景があります。紀元前十八世紀ごろ、イスラエルの十二部族の父親ヤコブには四人の妻がありました。その中でヤコブは、ラケルという妻を最も愛しましたが、その愛妻ラケルはベニヤミンを産んで死んでいきます。高齢出産と、羊飼いの厳しい労働が、ラケルの体力を消耗させたのでしよう。夫ヤコブは、悲しみの中でラマに妻ラケルのための墓を建てます。ラケルの墓としてずっと残っていきましました。そして時代は下がつて紀元前六世紀、ユダはバビロンに滅ぼされ、捕囚の民としてバビロンに連行されます。その捕囚の民が、ラマにあるラケルの墓の側をうなだれてバビロンに連れて行かれます。その姿を見たエレミヤは、地下に眠っているラケルは、母親として墓の下で、連れて行かれる子どもたちの哀れな姿を見て悲しみ嘆いている、と語りました。マタイは、このラケルの悲しみに、幼児を虐殺された母親の悲しみを重ねたのです。ヘロデ王による幼児虐殺は、明らか

にモーセ誕生の故事をひいて書いています。モーセが生まれた時に、イスラエルの民はエジプトで奴隷でした。その奴隷の人口爆発を恐れたエジプトの王ファラオは、イスラエル人の男の子をナイル川に放り込んで人口調節をしようとしています。幼児がナイル川に放り込まれて殺されたのがモーセの時代です。そして、イエス・キリストのご降誕の時も幼児虐殺があった。これは旧約聖書の律法を伝えたモーセと、新約聖書の福音を伝えたイエス・キリストは、その誕生において類似する悲劇が起こった。マタイは明らかにモーセとイエス・キリストの対比として、このヘロデ王による虐殺を想定したのです。ですから、イエス・キリストのご降誕は、旧約聖書からヤコブの妻ラケルの悲しみ、モーセ出生時の幼児虐殺、そして預言者エレミヤやミカ、実に壮大に旧約聖書と関わり、預言の成就としてイエス・キリストが生まれたと、マタイは伝えようとしています。マタイの旧約聖書に対する洞察の深さ、想像力の豊かさに感嘆させられます。

次に、歴史的人物と出来事についてです。「ヘロデ王」とありますが、これはヘロデ大王といわれた歴史的に実在した人物です。紀元前三十七年から紀元前四年までユダヤの王として君臨した王です。紀元前四年に、ヘロデ王は虫に噛まれて死んだと言われています。その虫は虫垂炎だそうです。要するに盲腸が腹膜炎を起こして死んだということです。腹膜炎ですから、激痛の中で亡くなったと思います。そのヘロデの在任中にイエス・キリストが生まれた。そうであるならば、イエス・キリストの誕生は紀元前四年となる。また、ルカ福音書は、キリニウスがシリアの総督であった時に、ローマ皇帝アウグストウスから人口調査の命令が出されたとあります。この人口調査は紀元前六年と言われています。すると、イエス・キリストの誕生は紀元前六年から紀元前四年までの間であろうということになります。しかし、決定的な証拠は見つかっていません。

このヘロデ王はユダヤ人ではなくてイドマヤ人でした。彼はローマ皇帝の保護の下、王に君臨しました。ですからヘロデ王は、ユダヤ人に取り入ろうとしました。それが、壮大なエルサレム神殿の建設を生み出していったのです。ヘロデは政治家として、また行政官としてはたいへん優れていました。ユダヤに次々と立派な町を建て、上下水道をめぐらせ、大きな公共事業に成功しています。しかし、華々しい政治の陰には抑圧された人々がたくさんいて、ヘロデは強権をもって民衆を支配しました。ヘロデによって殺害された人は数知れません。そして、ヘロデは権力に異常に固執する性格を持っていました。自分の妻、自分の子供から王

位を奪われはしないかと疑い、殺害しています。自分の王位を守るために、子供さえ殺しているのです。マタイが告げるベツレヘムの幼児虐殺の記事を読んで、人々は「ああ、ヘロデなら自分以外の王は認めないであろう。幼児虐殺はあり得る」と納得できるような人物であったのです。マタイは、イエス・キリストのご降誕に関して、この実在のヘロデを登場させて、さもおりなんと思わせるような記述を加えています。

もう一つは、当時の民間信仰です。東の博士たちは、新しい王メシアの誕生を星を見て知ったとあります。当時、偉大な人物が生まれる時には異常な星が現れるという民間信仰がありました。マタイは、この信仰を受け入れて、星の輝きでメシアの誕生を知ったと書いたのです。しかも、エルサレムからベツレヘムまで星が先立って導いたとあります。エルサレムからベツレヘムはほぼ真南です。星が真南に動くということはないわけです。このような素朴な信仰をそのままマタイは受け入れて、イエス・キリストのご降誕の特異性を訴えています。

大変おどろきっぱでありますけれども、マタイは、旧約聖書はもとより、歴史的人物と出来事、そして民間信仰を織り交ぜて、イエス・キリストのご降誕の出来事を神話的に表現しています。マタイは、きわめて柔かい頭脳で、そして何よりもイエス・キリストこそ真のメシア、キリストであるという信仰に立ってこのプロローグを書いたのです。このプロローグから、わたしたちは、どのようなメッセージを受け止められるのか。このことが大切なことです。マタイは、この降誕物語の中でいろいろなメッセージを発していますが、二つのメッセージについてお話したいと思います。

一つは、東の学者たちのキリスト礼拝です。彼らは占星術の学者であったと記しています。これはペルシャ、いずれにしても現代の中近東地方でしょう。この地方は夜空の星が美しく見える占星術の盛んな所でした。異邦人の彼らに、新しいメシアの誕生が星で示された。これは、とりもなおさずイエス・キリストはユダヤ人の王であるだけではなくて、異邦人、世界の王であると言っているわけです。マタイ福音書は、しばしば旧約聖書からの引用を記しています。これは、ユダヤ人に対してイエス・キリストが神の子、救い主であることを弁証しようとして書いたので「預言の成就」という言葉が頻繁に出てくるのです。そのマタイが、イエス・キリストのご降誕はユダヤ人だけではなく、異邦人にも知らされた。そして彼らははるばる訪ねてきてキリスト礼拝をした。世界のメシア、キリストを

伝えようとしています。八十年代の王は、言うまでもなくローマ皇帝でした。そのような中で、「いや、真の王はイエス・キリストである」と、マタイは語りたかったのです。パウロなどを中心として、キリストの福音はローマ世界に広がり、異邦人クリスチャンがたくさん現れていました。そのような背景の中で、マタイは、東の学者たちのキリスト礼拝は世界の王としてのメシアの姿を現そうとした。これが大きなメッセージだと思います。

一方のエルサレム神殿の祭司長や律法学者たちは、メシアの誕生地を、預言者ミカの言葉からベツレヘムと解き明かしました。けれども、彼ら自身はそこに行こうとしていません。イエス・キリストを拒否したユダヤ人の姿を表していると思われる。東の学者たちは、幼子イエスに、黄金・乳香・没薬を捧げました。贈り物が三つですから三人の博士と言われ、後世の人はこの三人を、メルキオール、キヤスパール、バルタザールと名づけました。そして彼らはペルシャ、インド、アラビアの王である。すなわち世界の王たちが、イエスこそが真の王メシア・キリストであると礼拝した、と美しい想像として膨らませたのです。わたしたちは、この異邦人の学者たちの末裔としてキリスト礼拝に繋がっています。

二つめのメッセージはヘロデによる幼児虐殺です。この幼児虐殺は、歴史的事実ではありませんけれども、マタイは、この事件を記すことにおいて、イエス・キリストの姿を最も強く浮かび上がらせたいと願って書いたと思われます。学者たちから、新しい王の誕生を聞かされたヘロデは、不安を抱いたとあります。これは自分以外の王の出現を許せないと思ったということです。彼は、ベツレヘムが出生地であると知って出かけて行く学者たちに「行ってその子のことを詳しく調べて、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言っています。けれども、もちろん拝むつもりはなくて、殺すつもりでした。ヘロデの不安と殺意を大きく扱っています。そして学者たちからの報告がないことを知った彼は、怒ってベツレヘムに軍隊を送り込んで二歳以下の幼児を虐殺していきます。このヘロデは、明らかに殺す側に立った人間です。自分の権力、力を誇示して自分に逆らう者を殺す。言うならば、この世の力ある者の姿で、高慢、自己中心、そして隣人不在の象徴、これがヘロデ王です。マタイは、ヘロデ王の権力を浮き上がらせて、その背後で殺される側に立って誕生したイエス・キリストの姿を鮮やかに対比させています。「ヘロデの強権」と「幼児イエスの無力」の対比です。私は、マタイはこのメッセージに力点を置いていると思っています。なぜなら、この姿

こそがイエス・キリストの生涯を見事に暗示しているからです。イエス・キリストは常に殺される側、抑圧される側に立ち続けられました。そこで貧しい者に対して「神にあつて、あなたがたの生は祝福されている、生きよ」と語られました。そしてイエス・キリストは、まさにご自分が十字架で殺されたのです。イエス・キリストの生涯は、逆らう者を殺すヘロデとは対極にあつて、人に仕え、支え、自分の命を捧げる愛を貫き通されました。ヘロデの強権の反対側で生まれたイエス・キリストの生は、そのような意味を持っています。マタイはこの事実を、強いヘロデと弱いイエスとの対比の中で語ろうとしています。

話は変わりますが、ソ連は一九九一年に崩壊しました。硬直化した官僚制度が人間の自由を奪つて、社会が閉塞していったのだと思います。この時に、共産主義の反対側にある自由主義が勝つたと思われました。以来、自由主義が世界をリードして来ました。ところが、現在、自由主義は歯止めがかからず、強い者が勝ち、弱い者はますます苦しい状況に追い込まれていく。強者が横暴に振舞う。人間を人とは見ないで物として扱う人間不在の社会である。その行き着いたところが、現在の身動きのとれない不況の中で殺されていく人に現れている。ヘロデのように、むき出しで幼児虐殺はしません。一応合法的ではありますが、事実としては強い者が弱い者を殺している構造には変わりがない。今の時代、ヘロデが歩んだのと同じ道を進んでいる。そこには未来が見えない。東の学者たちは、ヘロデから「見つかつたら知らせてくれ。わたしも拝もう」と言われました。けれども学者たちは、夢でヘロデのところに戻るなどという知らせを受けて、別の道を通つて帰つたとあります。これはローマ皇帝ネロが即位した時に、東の国から来た表敬訪問団が、来る時とは違う道を通つて帰つていったという出来事があつたそうで、マタイはその事実を踏まえたのであろうと考えられています。ヘロデの道、これは死に至る道です。今わたしたちは、別の道を模索しなければならぬと思います。別の道、それはイエス・キリストの道です。命を分かち合つて、共に生きる、共生の道です。イエス・キリストが魂を注ぎだして示された奉仕と愛に生きる。これを真剣に探し求める。マタイは、ヘロデによる幼児虐殺を創作し、その裏側で弱く小さなイエスと対比させた。そしてこのイエス・キリストは、十字架で人間を絶対的に「よし」として是認し、共に生きるという福音を啓示された。東の学者たちのキリスト礼拝は、そのようなメッセージをわたしたちに伝えていると思います。

今週の木曜日から新しい二〇〇九年が始まります。どのような年になるのでしょうか。わたしたちはどのような年になろうとも、イエス・キリストへの信仰に立って、イエス・キリストの道をどんなに小さくても歩み続けたい。その中で確かな福音の喜びに与っていききたい。来たる年を一緒にそのような信仰に励みたい。このことを、年の終わりに知らされます。